

2008 Vol. 6 THE BSSC JOURNAL 通巻6号 2008年7月 日発行



びわこ成蹊スポーツ大学新聞 Biwako Seikei Sport College

THE BSSC JOURNAL

びわこ成蹊スポーツ大学の「今」を伝える © びわこ成蹊スポーツ大学新聞編集部 発行=びわこ成蹊スポーツ大学メディア研究会 〒520-0503 大津市北比良1204番地 http://www.bsscjournal.net/

粘り強く、たくましく、華麗に——今春のびわスポ・レディーには、こんな形容がぴったりくるように女子テニス、陸上の女子競歩でヒロインが誕生した。女子テニスの樋口由佳は毎日オープン、関西学生春季トーナメントを連覇。陸上は日本学生選手権の競歩1万mで沢田美紀が大会新記録の快挙で開学以来、初の学生女王に輝いた。開幕まで1ヶ月余りの北京五輪には、シンクロナイズドスイミングに青木愛が代表の座を射止め、メダルの期待を担って夢舞台に挑む。



急成長の樋口

両手にV 毎日オープンに続き関西学生トーナメントを制した樋口

どんな競技でも「最後まであきらめない」は、勝利に不可欠な条件だ。毎日オープンの決勝は、

「自分でピククリするくらい粘り強く戦えた」という精神力があった。毎日オープンの決勝は、

「強くなりた。挑戦するテニスをしたい。積極的な思いから今春、スペイン・バルセロナに武者修行に出かけた。全仏オープンで3連覇を果たした Nadalら男子のスーパースターを育んだスペインは、パワフルなショットを磨くのに最適な王国。3週間の滞在でローカルのトーナメントにも積極的に参加した。欧米各地からプロを目指す同年代の若手と戦うなかで「外国選手は、個性が強く、

毎日オープン、関西学生春季トーナメントのビッグタイトルを連覇したテニスの樋口由佳の勝因は、

「自分でもピククリするくらい粘り強く戦えた」という精神力があった。毎日オープンの決勝は、

「強くなりた。挑戦するテニスをしたい。積極的な思いから今春、スペイン・バルセロナに武者修行に出かけた。全仏オープンで3連覇を果たした Nadalら男子のスーパースターを育んだスペインは、パワフルなショットを磨くのに最適な王国。3週間の滞在でローカルのトーナメントにも積極的に参加した。欧米各地からプロを目指す同年代の若手と戦うなかで「外国選手は、個性が強く、

雨で中断が相次ぎ第1セットは4-2のリードから追いつかれてタイブレークに持ち込まれた。「緊張しないように自分のプレーだけ考えた」。ベースライン際を狙うショットに集中した樋口はタイブレークを制し、第2セットは6-2で危なげなく勝った。「サーブやショットのミスが出ると、ガタガタ崩れることが多かったけど、今季は冷静に戦えるようになった」と振り返る。関西学生春季トーナメントの決勝も第1セットのタイブレークを粘り

6-6に追いついた末の勝利。「相手のクセのあるショットに苦戦したけど、ボールをしっかり見極め、打点を変えた」。冷静な読みに加えて、考えるプレーができるようになったことで、得意のストロークに正確さもでてきた。植田監督は「これまでのがむしゃらなプレーが影を潜めて、思い切りのいいショットが打てるようになった」と成長に目を細める。

「まだまだ伸びる逸材」と植田監督は、たくましく成長した樋口に期待をかける。次の目標は学生日本一。「プレーを磨いてネットプレーも身につけていきたい。今シーズンは挑戦するテニスでがんばります」。強気の言葉の端々に自信があふれている。

びびたくましく びびたくましく



粘りと力強さが加わった樋口のショット

「がまん」でつかんだ悲願の初V!
びわスポから第1号の学生チャンピオン



「スタートから気分よく飛ばした」と会心のレースを振り返る沢田

歩の専門コーチを大学に招いてもらった。本格的な指導を受けてメキメキ力をつけたが、競歩は華やかな駅伝やマラソンと違って脚光を浴びることは滅多にない。走法も複雑で厳しい制約がある。「いろいろな面で競歩はがまんの競歩だ」と思う。レースも自分の強い気持ちで今回のレースをすれば、いい結果が生まれる。沢田にとって、競歩は山あり谷ありの人生に映るのだろう。「競歩はこれからもずっと続けたい。社会人になって団体や日本選手権で日本一を目指したい」。沢田のがまん比べはこれから続く。

「強力なライバルがいなかったから、楽な気持ちでレースができました。陸上の日本学生個人選手権女子1万mを制した沢田美紀は、46分37秒04の大会新で手にした初タイトルにも淡々としていた。28人が出場したレースは、スタートから沢田の思い描いた展開。積極的なレース運びで、1分50秒のペースを刻み、周囲を重ねるごとに後続を引き離した。終盤も快ペースを守り、ゴールした沢田は「技術的なことを考えるより、自分が勝てると思っ

たら力が出せるタイプ。レース前のタイムランニングは、私がトップで負ける気はしなかった。過去3度の大会で6位入賞が最高。歩形違反で失格が2度あり、4回生のラストチャン

の計らひで競歩に打ち込み、歩に打ち込み、谷監督の後押しした。敦賀気比高の2年から競歩に打ち込み、

「スタートから気分よく飛ばした」と会心のレースを振り返る沢田

2008年関西学生サッカーリーグ得点ランキング

順位	選手名	大学	学年	ゴール数
1位	金園英学	関西大	2	9
2位	小野真国	大院大	1	8
	瀬古朋弘	びわこ大	3	8
4位	篠部拓真	びわこ大	3	7

関西リーグ戦成績(6月22日)

対戦相手	得点者
第1節 近畿大 2-1	○ 山田、篠部
第2節 京産大 0-4	●
第3節 立命大 3-1	○ 瀬古2、篠部
第4節 桃山大 2-1	○ 鳥濱、篠部
第5節 関学大 3-0	○ 瀬古、二戸、平野
第6節 大教大 4-0	○ 平野、瀬古2、篠部
第7節 大院大 3-2	○ 篠部2、小池
第8節 姫獨協 3-4	● 瀬古2、船津
第9節 関西大 2-1	○ 篠部、岡野
第10節 阪南大 1-4	● 山田
第11節 同志社 5-0	○ 船津、瀬古、安本、平野、下

と球さばきのうまい篠部とゴールセンスに長けた瀬古が、互いの個人技を活かしながら組織的に切り替えた今季は、どこからでも攻撃を仕掛ける



競り合いにも強くなったびわスポイレブン

サッカーの関西学生リーグでびわスポ・イレブンが優勝戦線で奮闘している。ミラクルVといわれた昨季のリーグ初制覇から1年。前後期の通年制(2回戦)でリーグ王者を争う今季は、1部12チームが白熱の戦いを繰り広げながら、びわスポは前期を終えて8勝3敗。阪南大、関大と激しく首位を争い、9月からの後期にリーグ制覇をかける。12チームで最多の28ゴールをあげているびわスポは、開幕3戦目から5連勝で勢いに乗った。5月18日の関大との首位攻防も2-1で競り勝つなど2トップの篠部、平野を軸にMF瀬古が絡む多彩な攻撃が快進撃を引き出した。篠部と瀬古、平野の攻撃陣3人でチーム得点の7割近くを占める。快速のドリフラー平野と球さばきのうまい篠部とゴールセンスに長けた瀬古が、互いの個人技を活かしながら組織的に切り替えた今季は、どこからでも攻撃を仕掛ける



ドリブル突破でチャンスをつくるFW平野

リーグ連覇に燃えるブルーイレブン

強みがある。中盤も小池、船津のダブルボランチが安定しているほかデビュー5戦目で初ゴールをあげた新人二戸を加えて攻撃の層は厚い。リーグでも飛びぬけた破壊力を誇る平野、守備の不安が大きな悩み。京産大に守備の連携ミスから0-4で敗れ、姫獨協教大には3-4で逆転負けした試合は、GKも含めて後手に回ったときの守りはもろい。天皇杯出場をかけた関西学生選手権(5月25日)も立命に1-3で敗れて1回戦で望みを絶たれた。松田監督は「攻守のバランスがまだまだ。一人一人がやるべき仕事、基本のプレーをしっかりやらなければならない。我々の目標は、関西の王座でなく、強い関東勢を倒して大学日本一になること。関西でモタモタしてはダメだとハッパをかける。

北京へGO!

シンクロナイズド水泳が始動! 夢舞台に挑む水中の舞



北京の夢舞台に挑む青木(左から3人目)

得意な足技を組み合わせたパフォーミング。和風の曲を使いながら日本の誇る技術を効果的にアピールするが、これまでの古典的になりがちなイメージから北京五輪は「現代社会にマッチしたモダンな日本」にこだわらる。最大のライバル、ロシアやスペインに勝つには、伝統の「股」を打ち破ることもメダルの条件といわれている。

「ビューティーマーメイド」と名づけられた新生チームで、青木は最年少である。13人の候補選手で競った昨年9月の代表選考会で11位。9人絞られる最終選考会で7位で通過し代表の座を射止めた。これまで世界選手権の大舞台では、補欠や出番に恵まれなかっただけに北京五輪に挑む青木の思いは人一倍強い。金子正子委員長は「最終選考会での青木は、オリンピックに何としても行きたいという思いが伝わってきて、思わず拍手したくなるような最高の演技だった。苦勞を重ねた分だけ、精神的にタフになってスケールの大きき演技に磨きがかかった」と賞賛する。

1ヶ月余りに迫った北京五輪。シンクロナイズド水泳にあって、子どもころからのあこがれの夢舞台である。「最高のパフォーマンスができるように」と、一日を大切に本番に臨みたい」と青木は、力強くオリンピックロードを歩んでいる。

強化合宿の間を縫って6月初め、青木は久しぶりにびわ湖のキャンパスを訪れた。身長173cm、ショートパンツからスリット伸ばした長い脚に端正な顔立ち。すれ違う学生の視線も気にすることなく「ここに来ると、ホッとする」。メダルの重圧から開放された自由奔放な22歳の素顔のぞく。五輪代表を勝ち取るまでには道の歩んでいく。

強化合宿の間を縫って6月初め、青木は久しぶりにびわ湖のキャンパスを訪れた。身長173cm、ショートパンツからスリット伸ばした長い脚に端正な顔立ち。すれ違う学生の視線も気にすることなく「ここに来ると、ホッとする」。メダルの重圧から開放された自由奔放な22歳の素顔のぞく。五輪代表を勝ち取るまでには道の歩んでいく。

青木には、つかの間の憩いも流れるような演技が

2部昇格に感激の女子バレー

創部5年目の快挙



コンビバレーで強豪関大をくだし、2部昇格を決めた女子バレー

登山にたとえらるなら頂上まであと一息の9合目の2部へ昇格した。9部からスタートした道のり、決して順風満帆ではなかった。昨秋、3部で足踏みしたチームは、男子バレーボールの名門サント

でくたして創部5年で最高。コンビバレーを徹底させ、ポイントに直結するサーブも強化した。命運をかけた関大戦は、その特訓の成果を発揮した。第1セットは有効的なサーブで主導権を握り、25-21で先取。伝統チームの底力をみせた関大の反撃で第2セットを21-25で競り負けたが、第3セットは再びびわ湖のベース。徹底的に相手の攻撃の中心になる選手を狙い、ミスをつかんだ。歴史のともいえる一瞬の切り崩して25-20。優位に立ったびわ湖は第4セットに昇格をかけて一気に勝利。ムニ丸でがんばります」ともベンチの鳥羽部長も控えの選手もすべてが一つになって戦った。18-16から若林

期待はずれに終わったバスケット

今年こそ上位争いを目標とした女子バスケットは、全関西選手権も西日本選手権も予想外の不振に終わった。全関西は滋賀短大と1ゲームの末、第4クォーターに得意の速攻で突き放して81-73で競り勝った。立命は38-82で敗れて4回戦で涙をのんだ。1部の立命と2部のびわ湖スコアの差はそのままレベルの格差につながった。この黒星のショックが尾を引いたのか、西日本は初戦の大阪国際大に1点差の56-57の逆転負け。



リバウンドを競り合う女子バスケット。粘り強い戦いが今後の課題

男子二人が優勝

第85回関西学生陸上対抗選手権大会

(5月9、10、17、18日)

梅がチャンピオンに



二年連続三度目の王座についた、三添章悟

2年連続3度目の王座についた、三添

「挑戦する立場から今年は挑戦を受ける立場という気持ちが強くなった。昨年の関西インカレ男子1500メートルで2位に健闘した梅拓也は、少しプレッシャーを感じながら1500メートル決勝のスタートラインに立った。仲間のエールが、微妙に変化していた梅の心に響く。「みんなの応援でリラックスできた」という梅は、1200メートルまでを乗り切り、残り300メートルで得意のラストスパートをかけて作戦だった。レースは思い描いた通りの展開で、ラスト1周の鐘が鳴り響いた瞬間、勝負をかけた梅は「一気のギアチェンジで先頭に立つ。「勝つ」と思った。冷静な展開の読みと裏づけされた自信。余裕のスタートをみせて4分3秒22でレースを制した梅は「優勝できてホッとした」と言葉が弾んだ。

梅はこの1年、1500メートルのレース一本に絞って練習に取り組んできた。2週間は練習から遠ざかったが、怪我をしたことで練習内容を変更し、スピード練習に重点をおいた。「内容はおもしろい」

梅は、残り300メートルで得意のラストスパートをかけて作戦だった。レースは思い描いた通りの展開で、ラスト1周の鐘が鳴り響いた瞬間、勝負をかけた梅は「一気のギアチェンジで先頭に立つ。「勝つ」と思った。冷静な展開の読みと裏づけされた自信。余裕のスタートをみせて4分3秒22でレースを制した梅は「優勝できてホッとした」と言葉が弾んだ。

梅はこの1年、1500メートルのレース一本に絞って練習に取り組んできた。2週間は練習から遠ざかったが、怪我をしたことで練習内容を変更し、スピード練習に重点をおいた。「内容はおもしろい」

梅は、残り300メートルで得意のラストスパートをかけて作戦だった。レースは思い描いた通りの展開で、ラスト1周の鐘が鳴り響いた瞬間、勝負をかけた梅は「一気のギアチェンジで先頭に立つ。「勝つ」と思った。冷静な展開の読みと裏づけされた自信。余裕のスタートをみせて4分3秒22でレースを制した梅は「優勝できてホッとした」と言葉が弾んだ。

梅はこの1年、1500メートルのレース一本に絞って練習に取り組んできた。2週間は練習から遠ざかったが、怪我をしたことで練習内容を変更し、スピード練習に重点をおいた。「内容はおもしろい」

春の戦いを終えて

西日本ナンバーワンの水球女子

高藤監督から若吉監督にバトンが渡った女子水球は、4月下旬の西日本リーグを制し、新監督の門出をVで飾った。中学生から社会人まで23チームが参加した大会は、2日間で9試合を消化する過酷な女の戦い。エースの津守を中心に堅守速攻のスタイルで順当に勝ち進んだびわ湖は、決勝も鳥取クラブに11-4で快勝した。84年のロス五輪代表だった若吉監督の指導で泳力を磨き、たくましくなったチームの目標は大学日本一。昨年準優勝に終わった雪辱をかけて9月の日本学生選手権に挑む。

海外で武者修行

スペイン ドイツ へ親善試合

スポーツ先進の欧州で武者修行——今春、サッカー部と女子テニスの樋口由佳(3回生)と高屋桃絵(卒業生)がスペイン・バルセロナへ遠征し、練習マッチやクリニックで腕を磨いた。世界のトッププロが集まるサッカーのリーグエスパニョーラを目の当たりにした学生たちは、本場のサッカー文化を肌で知り、テニスの樋口や高屋は、プロ育成に力を入れるクラブの素晴らしい環境に目を見張った。

海外遠征で磨いた技と知識

サッカーの海外遠征は、一昨年の豪州遠征に続き2度目だったが、スペインは午前中にスペイン人コーチの松田監督や選手のだれもがあのこのフットボール王國。遠征先は、ロナウジーニョに代表される世界でもトップスターが集まるバルセロナに1週間滞在した。松田監督はじめ新任の望月聡コーチ(准教授)らスタッフ、選手合わせて50人のツフ、選手合わせて50人の大所帯だったが、滞在中は午前中にスペイン人コーチの松田監督や選手のだれもがあのこのフットボール王國。遠征先は、ロナウジーニョに代表される世界でもトップスターが集まるバルセロナに1週間滞在した。



バルセロナのアマチチームと好ゲームを展開したびわスポは、地元ファンからも賞賛

練習試合は7試合を消化し、4勝2敗1分けの戦績だった。バルセロナ郊外の町ビックで行った試合では、スペイン人のお株を奪うような攻撃サッカーを展開して4-2で勝利。観戦した地元ファンから「日本の学生サッカーを初めて見たが、びわくりするほどレベルは高い。うちのチームに入ってプレーしてほしい選手が何人もいた」とびわスポを賞賛していた。

7万近いバルセロナファンが詰めかけたリーグ戦は、バリエドリードに4-1で圧勝。エトローの先制ゴールや18歳のホープ、ボージャンの活躍にびわスポのみんなが「ナマのゲームはさすがに迫力満点と目を輝かせて観戦した。スタジアムの見学では、ロッカールームやベンチを見て回り、スタジアム内にある博物館にも足を運び、100年を超えるクラブの歴史に興味を持つ選手も多かった。滞在中、クリニック指導にあたったスペイン人選手から「日本の学生サッカーを初めて見たが、びわくりするほどレベルは高い。うちのチームに入ってプレーしてほしい選手が何人もいた」とびわスポを賞賛していた。



FCバルセロナの若手、メキシコ代表のジョバンニを囲んだ記念撮影のびわスポチーム

考えるテニスで優勝バルセロナ遠征でつけた自信

女子テニスの樋口と高屋の二人は2月下旬からバルセロナのオープンクラブへ短期留学。かつてバルセロナにコーチ留学していた植田監督の人脈で二人の受け入れが決まったが、留学先のオープンクラブは80年代後半に全仏女子で優勝するなどスペインを代表する名選手だったフランチャ・サンチェスが家族で運営する名門クラブ。欧米や中国、韓国などアジアからプロを目指す若手選手の育成には定評がある。

「海外でもまれてたくましさを感じた。樋口も高屋も初めての欧州遠征だったが、びわスポに入学後にめきめき力をつけた樋口には、今回のバルセロナ遠征は飛躍へのステップになった。1日5時間半の練習は、コートの実戦だけでなくフィジカルトレーニングも組み込まれ、週末は近郊のクラブで開かれるトーナメントに出場する過密日程をこなした。若手選手が集まったオープンクラブでのトーナメントでは、ベルギーやフランスの選手とも対戦。地元スペイン選手に粘り勝って優勝するなど今回の遠征で樋口は大きな自信をつけた。「日本にはストロークで打ち合う私と同じような選手が多いけれどバルセロナにはいろいろな異質のタイプがいた。ゲームの組み方など工夫して考えるプレーの大切さを知った。テニスだけでなく、練習休みを利用してバルセロナの観光地、サグラダファミリアやゲル公園を訪れ、モデルニスモの奇才といわれた20世紀初頭の建築家、ガウディの歴史建造物

休日を利用してバルセロナの観光名所、スペイン広場を訪れた樋口(右)と高屋



を見たような感じだった」と樋口は「語学力のなさを克服した。最低限の英会話ができるようになった」と高屋は「大学最後の生活でバルセロナ遠征は、いい思い出になった。異文化に触れることで人生の価値観も変わった気がする」。テニスに打ち込んだ二人にとって、欧州遠征は大きな収穫だったが、滞在中は辞書を片時も離さなかつた。

ハンドボールを日独親善にひと役通じて

今回、大阪とハンブルクの友好事業の一環である友好親善ハンドボール大会に参加するため、4月25日から2週間、大阪選抜チームの一員としてドイツに行ってきました。

毎晩パーティーが行われてドイツビールを飲みながら、たくさんの人と交流を持ってました。ハム・ソーセージなどのお肉、じゃがいも、パンなどの簡単なものから手の込んだ料理まで、どれもがドイツらしさを感じるのはばかりでした。ドイツの方々のサポートのおかげで、コンディションも良く、ハンブルグのチームと4勝1敗と思っていた以上の好結果を残せました。



試合のあとはドイツビールで乾杯

出発前からパーティーでのお酒は覚悟して行きました。予想外だったのは、試合が終わるとユニフォームのまま、すぐにビールやシャンパンを持たされて乾杯することでした。私の周りにいたドイツ人は朝からずっとビールを飲んでいて、「ジャーマニウオーター」とニコニコしながらコップに注いでくれているので、試合直後にも関わらず飲んで皆で酔っ払っていました。

2週間のドイツ遠征では初めて戸の大きさと競技力はもちろんですが、観客の数や会場での演出など取り囲む全てに目を奪われました。子どもから大人まで多

くの人がハンドボール会場に足を運んでいて、日本でサッカーや野球を見るような光景でした。小さな子どもたちがプレーをしたり、試合観戦を楽しんでいました。将



ハンドボールの大阪選抜のGK高橋は、ハンブルグの少年チームとも交流

競技スポーツ学科3年 高橋絵美子



助け合う心を学んだ登山

フレッシュマンキャンプ

雨ニモマケズ、風ニモマケズ??新入生の慣例行事になったフレッシュマンキャンプが4月7日から6日間、武奈ヶ岳登山と大学艇庫前の琵琶湖岸で行われ、新入生356人がキャンパスライフのスタートを切った。前半8組と後半8組の2グループに分かれたキャンプは、雨と風に見舞われる悪条件だったが、フレッシュマン全員、持ち前の頑張りですべて4日の日程を乗り切った。武奈ヶ岳登山では、まだ残雪の山道に足をとられながらも全員が助け合いながら登山。キャンプの開校式で飯田学長が「悪天候のキャンプは、みなさんがいかに知恵を絞りを、力をあわせて成功させるか。お天気に恵まれるキャンプよりも得るものが多い」と激励したが、その言葉通りに仲間の輪は大きく広がった。

フレッシュマンキャンプは開学から中野教授、黒澤准教授ら野外スポーツの教員、ゼミ生がアイデアを出し合って取り組んできた行事。中野教授は「春のフレッシュマンキャンプ、夏の水辺、冬の雪上実習は、いまやびわスポが誇る伝統行事。自然のなかで人間関係を育む野外プログラムは、経験しただけでも大学で最も印象に残る授業にあげている」という。キャンプ生活を通じて野外教育に興味を持つ学生も多く、着実に成果をあげている。今年のキャンプでは、登山に備えて新でご飯を炊き、全員がおにぎりをつくる昔ながらの炊事実習があり、新入生は「みんなが力をあわせた炊事は、最高の思い出になった」と口をそろえていた。



クラス対抗の大縄跳びで芽生えた団結

「びわスポを日独交流の架け橋に」。4月17日、ドイツの地方都市、トリア市、トリア市で日独協会市で日独協会会長を務めるヨハン・アウバー氏が本学を訪れ、大久保副学長、金森、長瀬両教授と懇談し、ホームステイを通じた草の根交流やトリア市で開かれる市民マラソンへ本学からの参加を呼びかけた。

ドイツは旧西ドイツ時代、ゴールデンランといわれた世界でも例を見ない国民総スポーツ政策を推進したスポーツ先進国。研修旅行に参加したゼミ生は「日本とドイツの市民スポーツの違いは、なによりもスポーツに携わる人たちの意識、考えにある。我々が大学で学んでいる総合型スポーツクラブの取り組みには参考になることがいっぱいあった」と成果を振り返った。体操研究でケルンに留学経験のある長瀬教授にとり、ドイツは第二の故郷であり、その人脈で実現したゼミ旅行だが、長瀬教授は「スポーツを通じた国際交流は本学がこれから取り組んでいく重要な課題であり、学生時代から世界に目を向けることで考えも大きく変わる。スポーツ先進のドイツに目を向け、興味を持ってくれる学生が一人でも多く育ってほしい」とびわスポの国際化に意欲をみせている。

編集スタッフ (メディア研究会)
編集責任地 修
スタッフ
 高岡秀志、中岡憲彦、後藤剛史、紙谷貴也(以上4年)、熱田香苗、石本健太、木村 繁、白井美早子、東郷 寛、徳原拓也、長澤いずみ、平野甲斐、松本尚子、宮川雄登

びわこ成蹊スポーツ大学

〒520-0503 大津市北比良1204番地
 【代表】TEL:077-596-8410 FAX:077-596-8419 E-mail:jim@bss.ac.jp



JR比良駅から線路沿いに徒歩約15分。JR京都駅よりJR比良駅まで約40分。



自慢のマップを手にする金森ゼミ

ドイツ交流を呼びかけ



日独交流を話し合う大久保副学長(中央)とアウバー氏(右側)

「いい湯だな」。生涯アミリー向きな6つのコースを選定した。例えば、JR大津駅を起点にしたコースは、初心者や高齢者でも手軽に歩ける2キロのショートコースがあり、逆に体力のある人やファミリー向けの7キロのロングコースを設定した。ロングコースは湖畔の散策を家族でゆっくり楽しめるという。くつき、観光名所、グルメ、商店街のウインドウォッチングを取り入れ、どのコースもバラエティに富んでいる。大津市内には、17の銭湯があるが、そのうち12カ所をマップに盛り込んだ。1ヶ月余りを費やしたマップづくりは、携わった13人のゼミ生には貴重な体験だった。初めて銭湯に入ったという4年の十河友梨子さんは「お年寄りも気軽に話しかけてくれ、銭湯が憩いの場になることを実感した」という。マップを手につけて、汗をかいたらお風呂でゆったり。健康増進を迫られたびわスポ生、アイデアは、身近な社会貢献につながりそうだ。

還暦の新生

一念発起という言葉があるが、還暦を迎えて大学入生の長年の夢を叶えた新入生がいる。大阪・岸和田から通う宇野野さん。今年3月、40年近く勤めた大阪市役所を退職したが、第2の人生に大学生を選んだ。高校3年のとき、一度は大学進学を考えたが、家庭の事情からあきらめて市役所に勤めた。以来、財政や教育などいろいろな職場を経験したという宇野野さんは、高校時代からサッカー選手になるのが夢だった。社会人になっても、市役所のチームで活躍し、その経験を買われて02年の日韓W杯は、大阪市からW杯組織委員

「2の人生の毎日ですよ」と明るく笑った。



「充実した毎日過ごしている」と語る宇野野さん

「びわスポを日独交流の架け橋に」。4月17日、ドイツの地方都市、トリア市、トリア市で日独協会市で日独協会会長を務めるヨハン・アウバー氏が本学を訪れ、大久保副学長、金森、長瀬両教授と懇談し、ホームステイを通じた草の根交流やトリア市で開かれる市民マラソンへ本学からの参加を呼びかけた。

ドイツは旧西ドイツ時代、ゴールデンランといわれた世界でも例を見ない国民総スポーツ政策を推進したスポーツ先進国。研修旅行に参加したゼミ生は「日本とドイツの市民スポーツの違いは、なによりもスポーツに携わる人たちの意識、考えにある。我々が大学で学んでいる総合型スポーツクラブの取り組みには参考になることがいっぱいあった」と成果を振り返った。体操研究でケルンに留学経験のある長瀬教授にとり、ドイツは第二の故郷であり、その人脈で実現したゼミ旅行だが、長瀬教授は「スポーツを通じた国際交流は本学がこれから取り組んでいく重要な課題であり、学生時代から世界に目を向けることで考えも大きく変わる。スポーツ先進のドイツに目を向け、興味を持ってくれる学生が一人でも多く育ってほしい」とびわスポの国際化に意欲をみせている。